

真鶴半島の「水」

代表理事 宮村 忠

箱根山の不穏な火山活動が、注視の的となっ
ています。箱根山は、神奈川県と静岡県にまたがる三重式の火山で、火口原に芦ノ湖があり、多数の温泉が分布しています。内外の観光客で賑うシーズンを前に、箱根山の噴火情報は恰好の話題となりました。複雑な箱根火山の形成史の中で、およそ15万年前の火山活動によって、真鶴半島が形成されたと言われてい
ます。神奈川県最西端の小田原市と湯河原町に展開する溶岩丘陵の上を、細長く南東に伸びて、相模湾に鋭く突き出した半島です。

箱根火山をめぐる幾多の史話の中に、「水環境」にまつわる2つの話題をとりだしてみます。1つは真鶴町の山中を通る南郷山トンネルの出来事です。他の1つは、丹那盆地の下を東西に横切る丹那トンネルのことです。

言うまでもありませんが、東海道本線トンネルがまず完成し、その後東海道新幹線トンネルが建造されました。先に掘削を開始した丹那トンネルは、大正7年に工事着手し、昭和8年の貫通まで多くの犠牲者をともなって「苦闘16年」、計画では7年の工期でしたので2倍以上を費やしました。

この難工事は、断層群が並列する丹那盆地を横切るトンネルの掘削ですので落盤事故が相次ぎました。とくに、苦闘をつづけている最中に、北伊豆地震にも遭遇しました。丹那断層は、地表に2m以上の段差を印すほどで、昭和10年には、「国指定天然記念物」に指定されました。現在北伊豆地震の様子がうかがえる公園と地下観察館があり、興味深く時を過ごせます。

丹那トンネルの落盤事故は大量の地下水との闘いでした。それらの内容を記録した「丹那隧道工事誌」（鉄道省熱海建設事務所、1936年）など記録誌も多く、また吉村昭の小説「闇を裂く道」も真に迫ってきます。

丹那盆地の丹那トンネル掘削以前の様子を地形図で読むと、水田やワサビ田が分布しています。大量の地下水がトンネルを経て消失してからは、すっかり土地利用が変わりました。水田は畑地に、さらに、近年ではブランドとなった丹那牛乳もあり、酪農風景がみられます。丹那トンネルによる水環境の変化が、新しい土地利用の変貌となっています。

ところで真鶴半島は、高級感のただようリゾート地です。真鶴港は漁港ですが水産市場を備えているわけでもありません。市営の魚市場は、「魚座」と呼ばれる活魚を名物としたレストランです。真鶴港の周辺には、市営「魚座」のほか活魚料理店や寿司店が目立ちます。それでも漁業という雰囲気はありません。定置網用の漁船が少しあって、名物の活魚を提供しているようです。でも、漁師はいないそうで、定置網業で働くサラリーマンということのようです。もちろん、農業はほとんどみられません。産業らしきものは、山中にある採石場です。中世から続く真鶴町の地場産業です。小田原城や江戸城、幕末

に外国船にそなえたお台場など、関東地方の名立たる名石の産地で、「小松石」と称される安山岩です。溶岩が地表で急に冷やされたので、ブロック状に節理が発達しているため、採石や加工には有利です。真鶴港の一端には、狭いながらも積み出し埠頭もあります。

真鶴町が全国的に知れわたったのは、リゾートマンション計画を機に制定された「真鶴まちづくり条例」です。「まちづくり」を条例で規定した先駆的な事例です。さらに、平成17年には、市町村で初の事ですが、景観法に基づく景観団体となり、景観計画を告示しました。産業面では乏しい真鶴町は、まちづくりに関しては先進的ですので、高級感がただようのでしょうか。この傾向は、真鶴町の風土的特性が強く働いているといってもよいでしょう。なにしろ箱根火山活動の延長として、相模湾に鋭く突き出した半島で、土地に生産基盤を置く条件に恵まれません。なによりも、わずかの砂浜を除けば山地が大部分、核になる川はありません。「水」がないのです。少し以前まで、水を求めて隣の湯河原町に全面的に依存してきました。そのため、風光明媚・自然豊かな真鶴町は、産業を求めて賑わいを企てる方向ではなく、抑制型の行政を強いられてしまうのでしょうか。そんな真鶴半島に転機が訪れました。

昭和初頭に真鶴町の水道事業が開始されましたが、水源の確保は至難の業でした。明治初期に開通した東海道線は、箱根の北側を山越えていましたが、丹那トンネルの開通により、小田原、真鶴、湯河原、熱海の新しい東海道線が出現しました。その丹那トンネル仲間の湯河原町から水を買うことにしました。それでも自己水源を求めて、昭和35年に小田原市との境（小田原市江ノ浦）に水源を設けました。水量はわずかでしたが、貴重なものでした。ところが、東京オリンピックを目標に建設中の新幹線ルートが東の江の浦水源から真鶴町の西端まで、六郷山トンネルとなりました。水源を確保した翌年、六郷山トンネルで落盤事故が発生し、水源の水は枯れてしまいました。落盤現場からの湧水は、保守用の横穴トンネルを経て地上に流れ出ました、この保守用トンネルは、水源に近接していました。そこでこの大量の地下水を確保するため、新たな装いに水源を改良し、新水源に充当させることにしました。現在、六郷山トンネルを経て導入した水の約50%を使用し、残りは巾の広い側溝をつかって海へ放流しています。つまり、六郷山トンネルからの使用水量は、湯河原町から購入している水量を上まわるほどとなり、真鶴町の水は安定したようです。それでも、水量は解決したものの、水道料金は神奈川県では最高値ですし、全国でも最高値に位置します。ちなみに、東京23区の我が家の水道料金の2.5倍になります。

丹那トンネルと六郷山トンネルにかかわる、地下水の挙動話です。